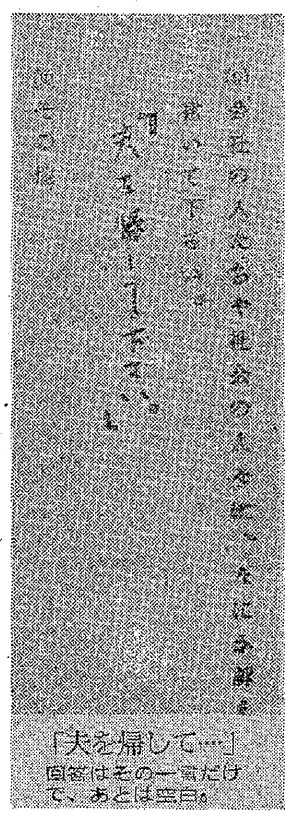
苦しみ訴える山野遺族

ただ一言……「夫を帰してください」

アンケートさえ弾圧する会社

三川鉱大爆発から三年半、山野鉱大爆発から二年、三池の遺族被災者も、山野の遺族も、まったく同じ苦しみにさらされていることが、朝日新聞がおこなった調査によって明らかにされた。以下の記事は、五月三十一日付朝日新聞から転載したものである。

あれから二年。福岡県嘉穂郡稲築町の山野鉱爆発事故の遺族は、六月一日三回忌の灯をともす。死者二百三十七人。物価の値上りつづくきびしい社会で、どうくらしているのだろう。大半が大黒柱の父、夫を失ったのだが――。



山野も三池も叫びは同じである

朝日新聞社は遺族全部に、十項目のアンケートを出した。返事がきたのが六十七通。五通は転居先不明で戻ってきた。あとは、回答を出さず、用紙をしまいこんでいた。それには、それなりの理由があった。それにしても、返ってきたアンケート用紙は、悲痛な言葉で満たされていた。T子さん（三七）の場合はたったひとこと「夫を帰してください」とだけ書かれていた。

犠牲者は組夫百十四人、鉱員百四人、転員十九人だった。なかには独身者もいた。だが、ほとんどが大切な働き手であったことに変りはない。事故後、会社は手を尽した。炭住もそのまま遺族に住まわせ、就転あっせんにも努めた。

「弔慰金では生活できない」

弔慰金四十万円、葬儀料十万円を一律に渡した。二年前の三十八年十月起った三井三池の爆発で、遺族に渡されたのと同じ額だった。ほかに、平均賃金の千日分が労災補償費。全国からの見舞金。それでも、みんなが手にした額は多くて二百万円、少ない人は百万円に満たなかった。羽田で落ちた飛行機事故では「外人に比べてすごく低い」といわれながら、日本人乗客に、一律六百万円が払われた。山野の遺族は、アンケートにつづっている。「二百万円で中学生、小学生、幼児、老母の五人ぐらしが、何年もてると思いますか」。

回答者の一五%は、成人した子どもや親類にすがってくらしている。しかし、残りの八五%は、妻が働いていた。失対作業、ゴルフキャデー、養鶏場、寮炊事婦、遊技場店員……。給料は最高が二万円。七、八千円という人もいる。

稲築町が誘致した「第一くつ下工場」に勤める人五十三人。遺族救済を大きな目的に、町や山野鉱が便宜をはかった企業だが、赤字は許されぬ。当然、従業員にはひとしく「能率」を要求する。年をとって、立ちずくめで働く作業は、未亡人たちには決して楽ではないようだ。

子どもを地元に残し、一人で東京に出てゴルフキャデーをしている野中ミヨ子さん（二七）は「事故後は仕事を三回ほどかえました。いろいろと人のうわさ（補償金などのことらしい）も気になるし、だれも知らない東京に出ました。一カ月二万か二万五千円あれば、親と子は別れて生活しなくてもよいのに。なんとかならないでしょうか」と答えている。子どもは「長女きよみ、六才」。小学校一年生、かわいい盛りである。

愛媛県今治市のタオル工場で働く岡田桃史子さん（三一）も子どもを思う。「子どもたちに母親として何もしてやれない」苦痛をつづり、願いはただ一つ「父親がいなくても元気にすなおに育ってほしい」と。

アンケートの「希望」欄はほとんど生活苦を訴えたあとに、必ずといってよいほど「わたしはどうあれ、子どもたちだけは」と母心がつづられていた。そして、片親であることが、子どもの就転に響きはしないか、と案じ「記者さん世間にこのことを訴えて下さい」と付記した母もいた。

二年たつというのに、遺族全員がまだ遺族年金をもらえないでいる。事故当時の制度によると、労災補償金をもらった遺族は、事故後六年たたないと遺族年金がもらえないことになっていた。去年二月に改正され、労災補償も一時金だけでなく、原生年金とともに月々遺族に支給されることになった。

しかし、改正前の山野の遺族たちはあと四年待たなければ遺族年金はもらえないというのだ。実際に、これだけ多くの人が困り苦しんでいるのに、法はあくまで規則をタテにとりつづけている。「とくめいをおゆるし下さいませ」とえんぴつ書きで答えてきた人（多分女性）はこう書いていた。

【会社や社会の人々に、なにか訴えたいこと】の欄。「人を人とも思わぬそちはとって下さいます

「根性ものがたり」（8）

職場では大いばり……

たった一人の三本線

本所　岳昌男さん

岳昌男さんは四十八才、勝立分院のマッサージ師である。

医者二人と看護婦、薬剤師など二十人からなる勝立分院の中でたった一人の三池労組員である。

そればかりではない。戦争中軍隊で中国に狩り出され、演習中につきささった弾丸の破片で片眼を失ない、さらにこの四、五年は残る左眼の視力も弱った身体障害者である。

花園町の自宅からバスで転場に通うにも、道を横切るのに奥さんの手が必要である。

この岳さんに、会社はあらゆる説得工作をかけてきた。

目が不自由だから、みんなにさからうと仕事さえできなくなるぞと、毎日説得された。そして最後には院長が家にきて、

「新労にさえ来てくれれば、今後のあなたの身分は保障するから」とまでいった。

奥さんに支えられて

岳さんの仕事、マッサージも最近は物理療法が発達し、マッサージ師にも不断の勉強が要求されし、また、医者の協力も欠かせないものとなりつつある。

また、福岡県下のマッサージ師の講習をうけたとき、岳さんは自分の勉強が不足していたことを感じた。

「組合運動で医者と対立ばかりしていては自分はとり残される」と、技術者として岳さんは素直に感じた。

「このときは本当にふらふらしました。私の転場も平島さんを中心にガッチリ固まっていたのに、彼が強制配転させられて以来、一人へり、二人へりでとうとう私一人になってしまった」

これを相談したとき、奥さんはこう言った。

「いままで闘ってきたのに、いまさら第二に行くのは残念です。三池闘争以来、親兄弟や親戚に私たちがいろいろ言ってきたことはみんなウソになります。人間の生き方はそう簡単に変えられるものではないのではないですか？」

夫婦二人で長いつき合いでもあり、組合運動の先輩でもある平島さんに相談にも行った。

「どうせなら、辞めるつもりでやれ」ともいわれた。

奥さんとみんなに支えられて岳さんの心は固まった。

日光を奥さんと二人で旅行したとき……

卑劣な恐迫も

岳さんの返事がはっきりしたとき、病院の扱いはガラリと変った。年一回の旅行にも「不具者だから……」とか「人がおらんと便所にも行けんから」といって、わざとイヤがらせをいった。寮会や送別会はすべてボイコットである。また

「いままで勝立分院の者は、あんたが目が不自由なのでいろいろ協力してきたが、今後一切手をひかせる」ともいった。

「これは完全な恐迫ではないですか」と岳さんはクチビルをふるわせる。

転場ではむしろ大切に

しかし、岳さんの態度と心が決ったあとは、たった一人の三池労組員は、みんなの中でむしろ大切にされているという。

岳さんは自分の身にも生き方にも一点のヒケ目も感じずに胸を張っている。患者さんも、岳さんが何かの都合で休むなら、いつもの半分も来ない。

また、ある新労組の看護婦さんも岳さんの所にそっと来て、「三池労組にいればよかった」としみじみ告白するという。

岳さんの顔は自信と明るさにみちていた。

「返事出すな」と差止め

百六十五家族から返事がこなかった。なぜだろうか。

稲葉町のK子さんは「いまさらなんにもいうことはありません。書いたからって、苦しい生活が楽になるわけでもないでしょう」とたずねた記者を追返した。同じ炭住のH子さんは「なんにも聞かんで下さい。そっとしといて下さい」と奥に引っこんだ。〝遺族扱い〟されるのがいやなのか、古傷にさわられるのがつらいのだろうか。それにしても、東京にでてキャデーをしている野中ミヨ子さんがいったように、炭住には遺族に対するモヤモヤしたものが立ちこめていた。

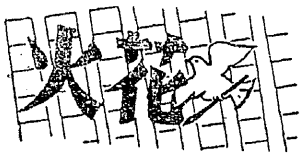
N子さんを炭住にたずねて、その一因がわかった。「返事を出すな、と止めて回った人がいたのですよ」といった。その後届いた返信の一通にも「会社の人はこの便りが着きましたところあわてて手紙を集めて回っていました。私の手紙はやぶいたことにしてあります。だから名前を出されては困ります」と書かれていた。

いろんなウワサが流れていた。山野鉱当局も、クツ下工場もこのことは強く否定している。だが、

「人命尊重の世の中に、人を大切にして事業をなりたたすよう」な。

回答をくれなかった人々の多くは、ウワサを知っていた。「回答出したことがわかったら、工場をクビになる」「安く住める炭住を追出されるかも」におびえていた。

「俺の職場の全員に見せたい」



五月二十八日、北九州の仲間約二十名が「大牟田COO患者を守る青年の会」の仲間と一緒に熊本医大にCOO患者を見舞った。以下はそのときの各人の感想である。

A「三池のCO問題とぼくらの転場の問題とどう結びつくかということが何度も論議されてきたけれど、あの実態は合理化の本質をズバッと表現している。ぼくらの議論なんか吹っとんでしまった」

B「とにかくひどい。おれも、宮島青年がベッドで闘っているのに負けないように闘わにゃならん」

C「おれの転場の全員をここへつれてきたい」

D「宮島青年の母さんが涙を流して訴えていたが、いままでに何百回となく同じことを訴えてきているのに、なおかつ涙ぐんでいる姿に心をうたれた。からだ全体での三井に対する怒り、抗議の行動としてうけとめた」

E「僕はカメラを持ってきていたが、あまりの現実の苛酷さをみせつけられ写すことができなかった。しかしカメラには写せなかったが、僕の口でこの事実を語っていく」

F「なにがなんでも、北九州での〝三池の闘い〟は成功させんといかん。患者や家族の苦労を考えたら、どんなことでもできそうな気がする」

（これは「三池の闘い」北九州上演成功実行委員会のビラから引用したものです）

捕虜の耳に10ドル

〝鬼軍曹〟が米軍の残虐を証言

「アメリカ軍は、ゲリラの捕虜の耳を切りとったものに十ドル（三千六百円）ずつの賞金を与えている。わたしも、数人の捕虜をなぶり殺しにするよう将校から直接命令された」――アメリカ南カロライナ州で、ベトナム行きを拒否してたたかっている特殊降下部隊のハワード・レビ大尉をさばくために開かれた裁判。大尉の勇気に感激した〝鬼軍曹〟はじめ元隊員たちが、弁護側証人として出廷「残虐な戦争を拒否する大尉は正しい」と証言した。【KNA】